

・スポーツ・

難聴の大産大投手、初勝利



ミックスゾーン

先天性の難聴でほとんど耳が聞こえない右腕が、今秋の阪神大学野球リーグ戦で初勝利を挙げた。大阪産業大(大阪府大東市)4年の広中蒼磨さん(21)。最終学年で有終の美を飾り、卒業後は聴覚障害者によるろう野球の社会人チームでプレーする予定だ。「次こそは野球人生で

一度も届かなかつた全国大会で活躍する」と憧れのマウンドを目指す。
奈良県大和郡山市出身。小学3年で野球を始めた。高校は祖父の故郷で島根県益田市にある益田東高に進学。今夏の甲子園にも出場した強豪で3年夏に背番号1を背負つた。

大学野球では、身長165cmと小柄ながら最速141km/hの直球に加え、持ち味の制球力を武器に部員約200人の大所帯で1年秋から中継ぎ投手としてベンチ入り。学生最後の今秋のリーグ戦では第5節の天理大戦で1回3分の1を無失点の好救援で初勝利を手にした。自己最多の計6試合に登板し、10回を自責点2に抑える好投を見せた。ハンディキャップを抱えながら

も活躍できたのは本人の努力はもちろんだが、仲間に恵まれたのが大きい。高校時代は「あいうえお」など50音を示す指文字を約80人の全部員が習得。親元を離れた寮生活でのコミュニケーションや試合中の伝令やサインも指文字でやり取りすることができた。

大学入学後は、同級生の主務・福森凌さん(22)が部活だけではなく授業の補助など学生生活をサポートしてくれた。同じ経営学部に所属し、出身校は島根県の立正大瀬南高(松江市)。3年夏には夏の島根大会で対戦していた。縁を感じて入学後、約1ヶ月で指文字を習得したという。

「とても良い仲間に出会えて、多くの人に支えられて野球ができた。次の全く違う環境の中でも野球を楽しみたい」と広中さん。私は当時、両チームの対戦を取材しており、高校時代の彼の投球も記事にしていた。新天地での活躍を祈っている。

試合開始前にチームメートと指文字でやりとりする広中蒼磨さん(左)=神戸市のほっともっとフィールド神戸で

【長宗拓弥、写真も】

*「ミックスゾーン」とは、記者が競技後の選手に取材する場所のこと